

日本の若者世代の気候変動の熟議への参加の特徴と課題

—氷の伝統文化「御神渡り」を題材に—

Characteristics and Challenges of Japanese Youth Generation's Participation in Climate Change Deliberations: The Ice Tradition *Omiwatari* as a Case Study

福村 佳美 (Yoshimi FUKUMURA)¹

要旨

本稿は日本の気候変動の熟議への若者世代の参加の課題を究明する。このために、長野県諏訪地域の氷の文化「御神渡り」の気候変動対策を題材に、高校生とシニア世代のフォーカスグループによる熟議フォーラムを実施した。ここでは、異世代との議論での若者世代の発言回数と参加態度、議論の経験に対する満足度に着目した。この結果、女子高校生の発言回数が顕著に少なかった。また、高校生は比較的受動的な参加だったが、シニア大学生からの情報提供に驚きや恐れを抱いた。また、議論の経験に比較的満足していることが示された。

キーワード：熟議、気候変動、フォーカスグループ、異世代、高校生

Abstract

This study investigates the challenges of engaging the youth generation in climate change deliberations in Japan. A deliberation forum with focus groups of high school students and senior citizens was conducted on the topic of the climate change countermeasures in the ice tradition called *omiwatari*, in Suwa, Nagano Prefecture. The research focused on the frequency of youth engagement, their attitude toward

¹筑波大学人文社会ビジネス科学学術院 博士後期課程。メール：s2030020@u.tsukuba.ac.jp.

participation, and their satisfaction with the discussion, Results indicated notably lower participation among female high school students. Despite the relatively passive involvement of high school students, they emotionally responded to seniors and expressed satisfaction with the discussion experience.

Keywords: Deliberation, Climate change, Focus group, Intergenerational, High school students

1. はじめに

本稿は、日本の市民社会が長期的な気候リスクとその対策を熟議するための空間設計について検討する。気候変動は社会全体に影響を及ぼすが、気候変動対策を主張する声がすべて政策立案者に届くわけではない。特に若者は、年齢的・社会的な制約から、日本社会における間接民主主義での意思決定に関与する機会が限られている。日本では、Z世代と呼ばれる若者世代の気候変動に対する関心は、他国の同世代と比べて低い²。若者世代は気候変動が進行する未来を生きることになるため、この層の代表者が意思決定の場で十分な主張ができるかは極めて重要である。本研究では、日本の熟議空間における年齢と性別が議論に与える影響に焦点を当て、これらの属性の違いが若者世代の議論への参加の課題を明らかにすることを目指す。

世界の気候変動政策が目指すべきゴールに向けて遅々として進まない理由として、さまざまな社会的制度の不備があげられている。このうちの一つに、既存の民主主義制度の機能不全がある（五野井 2018）。顕著な例に、環境の変化に脆弱な集団、特に若者や将来世代の代表権の欠如があるだろう。このため、気候変動政策の分野では、直接民主主義の可能性が模索されている（O'Neill 2001）。

特に注目されているのが、熟議民主主義の原則に基づく討論型世論調査の手法である。熟議民主主義とは、ミニパブリックスとよばれるある行政区内から無作為抽出された市民

²民間会社の調査によれば、新型コロナ流行前の2019年から2021年の3年間の世界のZ世代の最大の関心ごととは「気候変動」であったのに対し、日本の同世代の関心ごとのトップ5に気候変動は入っていない（デロイトトーマツ 2021）。

が、熟議を経て意見が変容することを前提に、専門家から十分な知識提供を受けた後、自由な発言空間での議論を介して協調的合意に至ることを目指す、市民参加型の熟議の場である (Fishkin 2020)。この手法は、気候変動に脆弱な集団の声を吸い上げるのに効果的であるため、国内外の気候変動政策の討論型世論調査でさかんに用いられている (例えば Ghimire, Anbar & Chhetr 2021; 気候市民会議さっぽろ2020実行委員会 2020)。

気候変動政策の分野での討論型世論調査への期待が高まる一方、ミニパブリックスでの代表性については課題が残る。なかでも若者世代の意思決定への関与の難しさが、これまでの気候変動に関する討論型世論調査で指摘されている (Romsdahl 2020: 149)。これに対してアメリカでは、大学生とその関係者だけで気候変動に関する討論型世論調査を実施したケースがみられる。Schweizer, Cavalier, Attari, Dawson & Schweizer (2008) は、気候変動課題を大学の脱炭素対策に絞った討論型世論調査にすることで、その代表制を行政区の人口構成から大学生を中心としたステークホルダーに置き換え、学内での気候変動対策に対する若者世代の意見を聞くことに成功した。

Schweizer et al. (2008) の例は、ミニパブリックスと呼ぶよりも、フォーカスグループ・ディスカッションと呼ぶ方が適切だろう。フォーカスグループは、特定の興味関心を共有する人たちの視座を深く究明することを目的に、恣意的に集められた人びとで構成されるグループである (Kamberelis 2005; Knodel 1995)。フォーカスグループによる気候変動の熟議について Riedy & Kent (2015) は、一時的に構成されるミニパブリックスよりも、持続的なグループでの継続的な熟議こそが、気候変動にとってより重要視されるべきだと主張する。

そもそも、ミニパブリックスによる討論型世論調査は熟議民主主義の世界標準の手法といえるのだろうか。He (2006) は、中国ではその国特有の政策が討論の形式に強く影響するため、Fishkinの討論型世論調査の理論では十分に説明できないことが多いとし、この手法は欧米の文化的背景の域を出ないと批判した。このHe (2006) の指摘は、日本の討論型世論調査においても当てはまるだろう。長谷川 (2001) が日本人と留学生が日本語でのコミュニケーションを観察したところ、日本人学生の発言態度は他国の学生と比較して、終始消極的であった。こうした背景は、札幌市で開催された気候市民会議の参加者

の、「年少者ということもあり、自分はとてもプレッシャーのようなものを感じた」（気候市民会議さっぽろ2020実行委員会 2020: 91）との報告にも示唆される。もし、このような社会構造が、気候変動の熟議での若者世代の発言態度に影響を与えるとすれば、それは民主的とは言えず、若者世代が望む持続可能な社会の将来像を描くことは困難だと言わざるを得ない。しかし、これまで国内で実施された気候変動市民会議での若者世代の発言について、今のところ十分な検証がみられない。

そこで、本研究では性別と世代に焦点を当てたフォーカスグループによる熟議空間を設計し、これらの属性が議論にどのような影響を与えるかを明らかにする。このために、気候変動の影響への対策についての熟議フォーラムを実施する。適応策を中心とした課題定義では、地域社会が共有する気候変動の負の影響にどのように対処するかという議論に向かう傾向にあるため、政治的な二項対立が緩和策と比べて起こりにくく、地域の人びとが対策をとることに積極的になりやすい（Romsdahl 2020: 154）。本熟議フォーラムでは適応に焦点を当てることで、参加者がリスク回避の目的で発言を控える、あるいは主張が強くなる要因を減らすことを目指す。

これらを踏まえ、本稿では次の問いを検証する。

問1 世代と性別は、参加者の議論での発言にどのように影響するか？

問2 世代と性別の異なる人びとによる熟議空間は、若年の参加者にとって満足のいくものか？

本稿は、次章では、本研究で設計した熟議フォーラムの概観を説明し、続く章で問いに対する結果を示したのち、気候変動の熟議における属性の差が若者世代の発言の態度にもたらす貢献と課題を考察する。

2. 事例と手法

本研究では、地域の伝統文化として長野県諏訪地域の雪氷文化「御神渡り」を事例とした。御神渡りは冬季に諏訪湖面に隆起する氷の筋であり、これを神の渡り道として祀る神事でもある。室町時代からおよそ570年続けられてきたこの伝統は、地域の中で世代から

世代へと受け継がれてきた。ところが近年の暖冬のため、湖面の氷の筋の発現回数が減少している（環境省 2020）。気温の上昇の傾向を鑑みると、氷の筋の発現回数が将来はさらに減少することが必至であり、これによる将来世代への御神渡りの伝承が困難になるであろうことは想像に難くない。そこで、本研究の熟議フォーラムは、将来の伝承者である若者世代が現在の伝承者である高齢者と御神渡りの持続可能な伝承を主題に熟議する設計とした。

従来の討論型世論調査では、複数日程に分けて講義と熟議が繰り返される設計が多く見られる。一方で、若者世代は多忙であり、複数日程の集会に参加しにくいことが指摘されている（Muradova, Walke & Colli 2020）。これに対してカーネギーメロン大学は、熟議フォーラムのテーマを大学の気候変動対策にテーマを絞り、情報提供と熟議の時間を授業終了後の17:00開始、20:30終了となるように設計し、一定の成果を上げた（Schweizer et al. 2008）。このことから、本研究においても、テーマを気候変動の御神渡り伝承への影響とその対策と限定することで開催時間の短縮が可能であると考え、熟議フォーラムが1日（9:30-17:00）で完了するように設計した。

本熟議フォーラムへの参加者は、若者世代と高齢世代の2世代とした。若者世代の代表は、高校生のグループ（以下、高校生）とした。日本では、選挙権は18才から付与されるため、ほとんどの高校生は選挙権を持たないことで、日本の気候変動政策立案への関与の権利がないことから、本研究の趣旨に合致すると考えた。高校生の相手世代は高齢世代とした。年功序列を重視する文化的背景を考えると、高校生が高齢世代と対等な立場で議論に参加できるかを検証することは民主的な議論空間の可能性を探るうえで有効であると考えた。高齢世代の代表は定年退職後の人々とした。これは、高校生と世代差を大きく広げることで、高校生の年齢による議論への参加の課題がより明確になると考えたためである。高齢世代の代表は、地域の定年退職後の人々のコミュニティである、公益財団法人長野県長寿社会開発センター（以下、シニア大学）の諏訪支部の参加者から抽出した（以下、シニア大学生）。

参加者は、各世代からそれぞれ男女それぞれ4名ずつ計16名とした。フォーカスグループ・ディスカッションの特色が、10人程度の少人数でのインフォーマルな議論の場（千

年・阿部 2000: 58) であることを踏まえると、この人数は適当であると考えた。また、選出方法は異なるものの、政令指定都市である札幌市でオンライン開催された、ミニパブリックスによる気候市民会議さっぽろへの参加者が20名であったことを考慮すると、諏訪地域³での実施人数としては適正であると思われる。さらに、本研究の目的である、参加者の属性が議論に与える影響を深く理解するには、ミニパブリックスのような大人数でない方が望ましいと考えた。

参加者の募集は、長野県諏訪地域の県立高等学校校長会（以下、高校校長会）及びシニア大学の事務局を通じて行った。このうち、高校校長会への取次には、NPO法人SUWA次世代の学び推進フォーラムの協力を得た。当初は、諏訪市の広報や地域の掲示板を利用した募集を検討したが、筆者は市内に在住していないことからこれら方法を取る条件を満たさなかったため、上記機関の協力を仰いだ。

高校生の参加者は、御神渡りが現れる諏訪湖周辺に位置する高等学校4校から募った。この時、高校のカリキュラムの多様性を考慮し、3つの長野県立高校（うち1校は農業高校）に加え、私立高等学校の計4校から男女1名ずつの参加を、校長会経由で依頼した。この結果、女子学生、男子学生をそれぞれ2名選出した高校があったが、参加者全体では、男女比が等しく構成された。シニア大学からの参加者は、申請者から趣意書をシニア大学の職員に提出し、職員がシニア大学生らに回覧する形で募集した。募集の窓口をシニア大学としたため、数を超えて応募があった場合は、シニア大学側で男女比を等分にし、居住地が分散するよう調整を依頼した。シニア大学生は、もともと多彩な社会経験を有しているため、高校生の募集時のように複数の機関から募集する必要はないと判断した。この過程で集まった参加者の平均年齢は、高校生が17.3才、シニア大学生が70.1才であった。

本熟議フォーラムのプログラムは、Fishkin (2009) の討論型世論調査の構成に基づき、専門家らの講義と参加者によるグループ討議の2段階設計とした⁴。講義のあと、異

³令和2年の国勢調査の時点での札幌市の人口は約1,973,000人、諏訪市は約49,000人だった。

⁴本会では、気候変動の仕組みと御神渡りの歴史の講義の後、第一部では異世代間での議論、第二部では同世代間での議論となるように設計した。

世代間と同世代間で各15分の議論を実施した。

本熟議フォーラムでは、1グループあたりの定員を、日本人による議論に効果的な人数である4人（千年・阿部 2000: 66）とし、シニア大学生の男女2名、高校生の男女2名で1組とした。このとき、高校生は異なる学校の生徒と組み合わせるように配慮した。本研究の目的は、若者世代の自由な意見表明に対する課題を明らかにすることである。このため高校生を同じ学校の生徒と同グループにしないことで、独立して発言する環境を用意することを目指した。シニア大学生については、単一機関からの選出であるため同様の対応ができなかった。しかし、本研究の焦点は高校生にあることから、調査の内容に大きな支障を及ぼさないと判断した。

本熟議フォーラムでは、自発的な対話における参加者の自己表現の機会に性別と世代差が及ぼす影響を調査するため、参加者がファシリテータとなる手法（Nyumba, Wilson, Derrick & Mukherjee 2018: 24）を採用した。このため、本熟議フォーラムには専任のファシリテータを配置しなかった。しかし、日本人の議論の場での発言に対する心理的傾向を鑑みると、高齢者が発言を主導することが懸念された。この対策として第一部の議論では、以下の1から3の質問を用いた半構造インタビュー形式を用いた。これにより、用意された質問を相手世代へ投げかけることで、両世代ともに発言の機会を得られるように設計した。

相手世代への質問：

1. 御神渡りの何をどのように伝承していきたいか。
2. そのとき、気候変動によってどのような課題が生じるか。
3. コミュニティとしてどのような気候変動対策がありうるか。

分析対象のデータとして、第一部と第二部の議論を、ICレコーダを用いて録音し、テープ起こしした。その後、議論中の発言者の属性ごとに発言回数を計数した。さらに、発言内容をカテゴリーごとに分類し、それぞれの議論の中心となった話題を分析した。さらに、熟議フォーラムの前後に参加者らに質問票を用いた意識調査を実施した。この結果を分析し、先述の音声データの結果と合わせて分析した。

参加者らには交通費と謝礼金として1万円と昼食を提供した。また、講師らには謝金として3万円、諏訪圏外からの講師には交通費を支払った。この他会場費等、この熟議フォーラムの開催にかかった費用は松下幸之助記念志財団の助成によって賄われた。

3. 結果

本研究では、異世代間と同世代間による議論中のそれぞれの世代の発言の回数と内容を分析した。この結果、シニア大学生が全体を通して最も発現回数が多かった。最も少なかったのは女子高校生だった。また、異世代間の議論では、シニア大学生が対話をリードしていること、そのためシニア大学生の興味に応じて話題が半構造インタビューの形式から逸脱したこと、しかしそうであっても、高校生はシニア大学生の話に興味を示したことが示された。熟議フォーラム後の調査票調査からは、参加者らの議論に対する満足度はある程度高いことが示された。以下、それぞれの詳細な結果を示す。

3.1 属性ごとの発言回数

男性シニア大学生、女性シニア大学生、男子高校生、女子高校生の発言回数の総数と平均を、議論全体、第一部の異世代間、第二部の同じ世代間の別で表1に示す。

参加者	議論全体の総数	平均	第一部発言総数	平均	第二部発言総数	平均
男性シニア大学生	227	69.3	163	40.8	114	28.5
女性シニア大学生	258	64.5	115	28.8	143	35.8
男子高校生	209	52.3	103	25.8	106	26.5
女子高校生	75	18.8	38	9.5	37	9.3

表1：属性別の発言回数（回）

全体を通して最も発言回数が多かったのが、女性シニア大学生、続いて男性シニア大学生、男子高校生であった。もっとも発言回数が少なかったのは女子高校生だった。シニア大学生の性差による発言回数の差は大きくはないが、高校生の場合、男子高校生の発言回数は女子高校生の約3倍と、性差の違いが顕著であった。

異世代間での議論では、シニア大学生男女合わせて278回発言していたのに対し、高校生は141回であった。このなかで、高校生がシニア大学生に質問する時間帯の女子高校生の発言回数は、4人のうち0回が3人、1回が1人であった。女子高校生の発言回数のほとんどは、シニア大学生からの質問に答えるものであった。

同世代での議論では、シニア大学生が男女合わせて合計287回発言していたのに対し、高校生は143回と、シニア大学生の半分程度しか発言していなかった。

3.2 異世代間の議論

第一部の異世代間の議論に初めに、シニア大学生から高校生に、御神渡りを見たことがあるか、との問いかけがなされた。これに対し、ほとんどの高校生が見たことがない、あるいは見たことがあっても覚えていない、と回答した。あるグループでは、御神渡りはどのようなものかというシニア大学生からの問いかけに対し、このグループの男子高校生は、地域神話と結びついた神聖なものと述べていたが、これを聞いた同じグループの女子高校生は、御神渡りの神秘性には興味はないが氷の隆起の発現メカニズムを知りたいと述べていた。

ほとんどの高校生が御神渡りを見たことがないことを受け、シニア大学生からは、質問項目には含まれていない過去の冬の体験が語られる様子が記録されていた。具体的には、シニア大学生が高校生の時には諏訪湖でスケートをしていた話や、それが学校活動の一部であったことを知っているかという問いかけなどが、すべてのテーブルで交わされていた。議論のほとんどがこうした伝承行為に使われたため、高校生が既定の質問に従って御神渡りの伝承について意見を述べる機会はほとんどなかった。

その後、高校生からシニア大学生に御神渡しについての質問がなされた。このとき、主に男子高校生がシニア大学生に対して半構造化インタビューの手法で質問していた。シニア大学生の回答は、すでに高校生に語られた過去の経験と重複するものがほとんどであった。このとき高校生は、以下の2点を中心に質問を行っていた。

シニア大学生の御神渡りの記憶

高校生の関心の焦点は、御神渡りの形状などではなく、それを見たシニア大学生の感情に置かれていた。特に質問内容に「小さいとき」や「初めて御神渡しを見た時」を加えていたことから、高校生と同じ年齢だったころのシニア大学生の感情に興味があることが伺えた。このときの高校生の興味は、「御神渡しを端から端まで、氷の上を歩いて見に行ったことはありますか？」のように、自分たちが経験したことがない、御神渡りに付随する体験を問うものや、「昔子どものときとか初めて見たときとか、特別ではなく、当たり前のことだったんですか？」のように、自分たちとシニア大学生の御神渡しに対する視座の差を確認するようなものであった。こうした質問の背景には、「今だとあんまり御神渡りが無いから特別な感じ」である高校生の視座が前提になっていることがうかがえる。

シニア大学生の御神渡し伝承に対する考え

高校生はシニア大学生に、「御神渡しをまたこれから伝承していきたいと思いませんか？」のように、伝承の継続を望んでいることを確認していた。さらに、「初めて見た時に親や地域の方から御神渡しはどのように伝えられましたか」の問いかけや、「今の若者世代に御神渡しを伝えるとしたら、どのようなこと」を伝えたいか、あるいは「一番子供たちに伝えたいこと」はなにかを聞いていたことから、高校生の興味は、御神渡りがシニア大学生にどのように伝承されてきて、シニア大学生はそれをどのように伝えていきたいと考えているかという点と、伝承のためにどのような役割が自分たちに期待されているかを探ろうとしている様子が示唆された。また、「昔見た時と今起きている御神渡しで何が違うのかなとか」の問いかけから、伝承するものにどのような変化があるのかに興味があることが示唆された。

3.3 同世代との議論

異世代との議論と同様、高校生同士の議論の場でも女子高校生の発言回数が極端に少なかった。しかし、それは発言の機会がないのではなく、積極的に発言する意思があまりな

い、あるいは発言する必要性を認めていない様子であることが示唆された。たとえば、1つ目の高校生グループでは、男子高校生2人が互いに意見を出し合うところに女子高校生が参加する形式で進められていた。この時、「何かある？」や、「どうつなげようか？」など、男子高校生2人が他の参加者の意見を聞く様子が見られた。

2つめの高校生グループでは、出された意見を基に議論を展開するよりも交代で意見を出し合う形式で議論が進められていた。このため、女子高校生にも発言の順番が回ってくる様子が音声データから示唆された。

男子高校生はおおむね発言に積極的であったが、あるグループの男子高校生は、議論の終盤に、他の参加者に自分の学年（高校2年生）を明かして他の参加者の学年を確認し、全員が上級生であることがわかると「すみません」と謝っている様子が、音声データに記録されていた。

高校生グループでの議論は、地球温暖化によって御神渡りを見るのが困難になることを前提に行われた。この対策として、男子高校生を中心に御神渡りの再現方法について検討していた。あるグループは、湖の水を抜いて浄化することで結氷の可能性を高めることが提案された。もう1つのグループでは、1人の男子高校生が技術を利用した湖の人工的な結氷に言及した。この男子学生は筆者の促しに応じて、専門家らにその実現性について質問した。専門家らは、人工的な湖の結氷は技術的で困難であるうえ気候変動に悪影響を及ぼすことや、自然信仰の神道に適さない等の回答をした。気候の専門家は、代替案として模型での再現を提示した。このグループでは、この専門家の提案に賛成する意見があったが、意見の集約を試みるような議論にはならなかった。最終的に、人工的な御神渡りの可能性を探求した男子高校生は、地域の多様な世代との議論が必要と結論付け、そのグループは議論の総括にその意見を取り入れた。

3.4 高校生の議論への参加の満足度

質問票調査で、最も印象に残ったプログラムを選択式で聞いたところ、議論を選択したのは、高校生男女各2人、シニア大学生では女性4人だった。表2は、自由記述で明らかになった、異世代との対話に対する両世代の意見と所感をまとめたものである。高校生は、

シニア大学生が語る昔の諏訪湖の様子やシニア大学生の心情に関心がある様子が示された。

参加者	参加者に残った印象	詳細
高校生	御神渡りが当たり前になっていた	御神渡りを神聖視していないことに対する驚き
	諏訪湖でスケートができた	昔の気候との違いに対する驚きや恐れ 前提とする冬の生活が世代によって大きく違うことに対する驚き
	過去と現在の違い	冬の気候が時間とともに大きく変化することに対する驚きと不安
	予定を変更してでも御神渡りを見に行く	御神渡りや諏訪湖に対する愛着の差に対する驚き
	若い世代に御神渡りを見てほしい	伝統を未来につなぐことに対する責任の重さ
シニア大学生	御神渡りを見ていないこと	冬の体験が継承されていないことに対する驚き 経験していないものの継承に対する不安
	人工結氷やドローンの活用などの技術の利用	斬新な手法の提案に対する驚きと期待 異世代との議論の重要性の認識
	議論の場を持つことの提案	自分事として課題認識していることに対する安心感

表2：世代別にみる異世代との議論に対する意見とその所感区分

4. 考察

本研究では、日本の気候変動の熟議の参加者らの世代と性別に焦点を当て、これらの属性が議論の場での発言と参加者の満足度にどのように影響を与えるかを、高校生を中心に調査した。このために、気候変動の影響を受ける長野県の氷の文化「御神渡り」の伝承をテーマとした、高校生とシニア大学生各8名による1日の熟議フォーラムを開催した。この熟議フォーラムは参加者進行型のアプローチで行われ、高校生が議論にどのように参画するかを明らかにした。この結果、高校生は全般的に異世代との議論では自分の意見を表明するよりも聞き手に回る傾向にあり、女子高校生の発言回数が少ない傾向が強いことが示された。このように高校生は比較的受動的な参加にあったにもかかわらず、熟議フォーラム後の質問票調査では、高校生は本熟議フォーラムでの議論の経験に比較的満足していることが示された。

日本社会の倫理的背景には長幼の序があり、労働環境や部活動をはじめとする教育環境で今も影響力を持ち続けている（佐々木 2020; 相良・白井 2023）。このような文化的背景から、議論では年長者ほど自己表現の傾向が強くなる傾向が予測された。これに対し、本熟議フォーラムの男子高校生の発言量は、シニア大学生と有意な差は見られなかった。異世代間での議論では、シニア大学生の発言量が多かったものの、これは表2が示すように、高校生が知らない地域の気候や伝統について、シニア大学生が自分の経験を共有する場面が多かったためである。また、高校生は、男子高校生が中心であるものの自身の興味関心に基づいた質問を行っていたことや、ある男子高校生が人工的な御神渡りの可能性について、専門家の助言に合わせることなく主体的に自身の主張を述べた点を踏まえると、この熟議フォーラムは高校生に自由な発言の場を提供したといえよう。

一方、女子高校生は、他の3属性と比較して発言回数が極めて少なかった。シニア大学生の男女で発言頻度に差が見られないのは、所属する組織が同じでありお互いが顔見知りであるためと考えられる。これに対して高校生は、出身校が異なるため全員が初対面であったことに加え、ファシリテータが不在であったため、議論に貢献することが困難だったのかもしれない。とはいえ、同世代での議論時の男子高校生の発言回数は、シニア大学生の男女の回数と大きな乖離は見られなかった。このことは、女子高校生の発言回数の少なさは、世代間格差というよりも性別に起因するものであることを示唆している。

日本は、ジェンダー・ギャップ指数が先進国の中で最低レベル（内閣府男女共同参画局総務課 2021）であり、この問題は、女性の会議参加に否定的な一部の男性政治家の態度に象徴される（読売新聞オンライン 2021）。しかし、本熟議フォーラムでは、このような課題は見られなかった。むしろ、シニア大学生や男子高校生がたびたび女子高校生に意見を求める様子が示された。このことは、本熟議フォーラムは年齢や性別の差による視点の違いを受け入れようとする本熟議フォーラムの包括的な性質を示しているといえよう。

女子高校生の発言回数が相対的に少なかった要因に、発言を自主的に控えていた可能性が考えられる。平野ほか（2020）は、日本の20代の若者女性のなかには、女性が扶養的役割を担うという社会的期待に応えるために、自己の可能性を暗黙のうちに制限する傾向を指摘している。こうした背景を考慮すると、女子高校生がその場の雰囲気に合わせて自己の意見を表明することを控えるという選択をする可能性が推測される。

しかし、彼女らは議論に無関心であったわけではない。質問や発言の順番がくると、自身の意見を主張していた。たとえば、異世代で御神渡りの神秘性についてシニア大学生の男女と男子高校生が意見を述べる中で、ある女子高校生が、神秘性には興味がない、と表明したことは、このグループ内での議論が自由な意見表明の場であることを示している。このことから、女子高校生は積極的に発言しないものの、発言の機会があれば自分の意思を表明するという姿勢であったことがうかがえる。

高校生の発言の回数と内容からみると、異世代間での議論での高校生の関与は消極的であった。しかし、熟議フォーラム後の質問票調査では、高校生の異世代間での議論に対する満足度は相対的に高かったことが示された。特に、男女とも半数の高校生が議論の時間をもっとも印象に残ったプログラムとして評価していた。自由記述では、高校生はシニア大学生が語る地域の昔の様子に高い関心を示していること、それらが消えつつあることに危機感を持ったことなどが示された。このことから、高校生にとって本熟議フォーラムへの参加はある程度有意義にとらえられたことが示唆される。

高校生の議論の関心は、主にシニア大学生からの情報提供によるものであった（表2）。高校生は、シニア大学生の語りを驚きや恐れをもって受け止めたことが表2から

伺える。このような、異世代との交流が熟議の満足度に貢献する例は、他の気候市民会議でも見られる⁵。しかし、熟議民主主義が目指すのは、様々な立場の代表者がそれぞれの視点で課題をとらえ、異なる利害を乗り越えて協調的合意に至ることである。このとき、参加者は情報提供で満足することなく、得られた情報を基に意見を表明することが重要であり、その点で、本熟議フォーラムにおける若者世代の代表性は十分に確立されたとは言えない。

5. 結論

本熟議フォーラムでは、高校生は議論に満足感を示し、シニア大学生が共有する情報に価値を見出した一方で、若者世代の積極的な参加を促し、その視点や意見を十分に議論に反映させるという点では改善の余地がある。このことは、今後の熟議フォーラムにおいて、情報交換と多様な視点の積極的な表明をバランスよく促進することの重要性を示唆すると考える。この点において、本熟議フォーラムは女子高校生の議論への消極的な参加態度を明らかにした。気候変動対策はステークホルダー間でのトレードオフが課題となることから、若者世代をはじめとする気候変動に脆弱な世代の意見を踏まえた熟議が求められる。このため、若年女性の議論での発言を促進するファシリテーションの研究が待たれる。

本研究は、議論への参加者の選出に偏るがあることや少人数である点、また、個人の資質等が考慮されていない点で課題が残る。しかし、気候変動政策の立案過程で実施されるミニパブリックスにおける議論への若年女性の参加意識に課題がある可能性を浮き彫りにした点で、本研究は日本の市民社会における熟議民主主義に多少なりとも貢献できたと考えている。

謝辞

本研究にあたり議論にご参加いただいた皆様と参加者募集にご尽力いただいたNPO法人SUWA次世代の学び推進フォーラム、長野県シニア大学諏訪学部、長野県岡谷南高等学校

⁵ 「世代も職業も異なる方々と話せたことや、普段接することのできない情報に触れられた有意義さを語る方が多かった。」(気候市民会議さっぽろ2020実行委員会 2020: 98) や、「様々な世代で有意義な意見交換ができたと思います。」(武蔵野市 2023: 26) などの意見が報告されている。

校長林秀徳先生に心より感謝申し上げます。八剱神社宮司宮坂清氏および古役宮坂平馬氏ならびに信州大学名誉教授であり同じく古役の沖野外輝夫先生には調査の段階から、一般財団法人環境イノベーション情報機構理事長の功刀正行先生には本熟議フォーラムでの講義設計から当日の講義まで多大なご支援とご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。また本手法は、筑波大学大学院教授山本英弘先生に丁寧なご指導をいただきました。ここに記して感謝します。本研究は松下幸之助記念志財団の助成によって実施されました。

参考文献

日本語文献

環境省(2020)「気候変動影響評価報告書 総説」

気候市民会議さっぽろ2020実行委員会(2020)「気候市民会議さっぽろ2020最終報告書」<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/80604>. (2023年10月06日最終アクセス)

相良博昭・白井徹(2023)「日本におけるスポーツ文化の変遷と人権に関する現状と課題について」『関西外国語大学紀要：人権を考える』26: 35-46.

佐々木健(2020)「能力主義管理と日本的経営」『山形県立産業技術短期大学校庄内校紀要』16: 35-38.

千年よしみ・阿部彩(2000)「フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケース・スタディを通じて」『人口問題研究』56/3: 56-69.

デロイト トーマツ(2021)『デロイト トーマツ、日本とグローバルのZ・ミレニアル世代の意識調査の結果を発表』
<https://www2.deloitte.com/jp/ja/pages/about-deloitte/articles/news-releases/nr20220801.html>. (2023年10月9日最終アクセス)

内閣府男女共同参画局総務課(2021)『トピックス1：世界経済フォーラムが「ジェンダー・ギャップ指数2021」を公表』
https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2021/202105/202105_05.html. (2023年10月26日最終アクセス)

長谷川典子(2001)「異文化コミュニケーション教育の視点からみたテレビ会議の学習効果—日本人学生と留学生」『メディア教育研究』6: 23-34.

平野真理・三浦正江・近藤有美香 (2020) 「現代の若者が持つ社会における暗黙の女性観の探索的検討：文章完成法を用いた質的分析」 『東京家政大学研究紀要』 60/1: 57-64.

武蔵野市 (2023) 『武蔵野市気候市民会議 実施の記録』
https://www.city.musashino.lg.jp/res/projects/default_project/page/001/036/360/kiroku.pdf. (2023年10月06日最終アクセス)

読売新聞オンライン (2021) 『森喜朗会長発言、国内外で波紋広がる…「ショック」「性差別発言」』
<https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2020/20210204-OYT1T50147/>. (2023年10月6日最終アクセス)

英語文献

Fishkin, J. 2009. "When the People Speak: Deliberative Democracy and Public Consultation." Oxford University Press.

Fishkin, J. 2020. Cristina Lafont's Challenge to Deliberative Minipublics. *Journal of Deliberative Democracy*, 16/2: 56-62. <https://doi.org/10.16997/jdd.394>

Ghimire, R., Anbar, N. and Chhetri, N.B. 2021. The Impact of Public Deliberation on Climate Change Opinions among U.S. Citizens. *Frontiers in Political Science*, 3: 1-10. <https://doi.org/10.3389/fpos.2021.606829>

He, B. 2006. Western Theories of Deliberative Democracy and the Chinese Practice of Complex Deliberative Governance. In A.J. Leib and B. He (eds.) "The Search for Deliberative Democracy in China." Palgrave Macmillan, 133-148. https://doi.org/10.1057/9780312376154_7

Kamberelis, G. 2005. Focus Groups: Strategic Articulations of Pedagogy. In "Politics and Inquiry Qualitative Inquiry View project Discourse and Identity View Project. (3rd ed.)" In Norman K. Denzin and Yvonna S. Lincoln (eds.) Sage Publications Inc, 887-907.

Knodel, J. 1995. Focus Groups as a Qualitative Method for Crosscultural Research in Social Gerontology. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 10: 7-20.

- Muradova, L., Walker, H. and Colli, F. 2020. Climate Change Communication and Public Engagement in Interpersonal Deliberative Settings: Evidence from the Irish Citizens' Assembly. *Climate Policy*, 10: 1322-1335.
- Nyumba, T.O., Wilson, K., Derrick, C.J. and Mukherjee, N. 2018. The Use of Focus Group Discussion Methodology: Insights from Two Decades of Application in Conservation. *Methods in Ecology and Evolution*, 9/1: 20-32.
- O'Neill, J. 2001. Representing People, Representing Nature, Representing the World, 19/4: 483-500.
- Riedy, C. and Kent, J. 2015. Australian Climate Action Groups in the deliberative system. *Environmental Politics*, 24/3: 363-381.
- Romsdahl, R. J. 2020. Deliberative framing: opening up discussions for local-level public engagement on climate change. *Climatic Change*, 162/2: 145-163.
- Schweizer, V. J., Cavalier, R., Attari, S., Dawson, T. and Schweizer, V. 2008. A Deliberative Poll on Climate Change. UNITAR-Yale Conference on Environment and Democracy: 10-11.